

と催促してくることも多く、Kさんにとってはほめることが一番の薬であった。ほめることで自立心が出来ることを期待している。

VIII. 考察

事後評価：両親と生活していた人が、年をとってから施設生活になじむというのは難しいことであると思われる事例。しかし施設で頼りとする担当職員とのコミュニケーションがうまくとれれば、Kさんの場合は困難ではないだろう。訴えが増加した時は、何らかのサインであるにとらえ、早急に手立てを取ると良いと思っている。

H8.10月には左乳房部分切除術、H9.5月転倒による右肩骨折の整形術を受け、入院による精神面の落ち込みがないよう、家族・職員の協力を得、見舞いに行き行って励ましてもらった。今後は健康面を留意し、楽しい施設生活を送れるよう援助していきたい。

I. 標題：不適応行動(幻聴、幻覚、暴力、暴言、水飲み、トイレがよい)に対する軽減への援助過程

II. 事例の要旨：人間関係・自己実現

(1) 入所前の入所検討会において、幻聴、幻覚による精神的不安定のため、精神科に入院していたことを知らされる。

(2) 入所後、幻聴、幻覚について、程度、種類、原因についての行動観察

(3) 母親への依存度が高く、母と別れた後の精神状態が悪くなることがわかり、ケース会議にて検討する。

(4) 本人に自信を持たせることを目標に、職員の意思統一した援助の結果、幻聴、幻覚は軽減した。

III. プロフィール

氏名：K. N 性別：女 生年月日：昭和40年11月7日 32歳

入所年月日：平成8年2月28日 在所年数：2年

IQ：29 MA： 知的障害の原因：ダウン症

身体状況：身長137.1cm 体重：56.5kg 肢体不自由(運動機能障害)：無

視覚障害：無 聴覚障害：無 言語障害：無 自閉的傾向：無 てんかん：無

身体障害者手帳：無 療育手帳：有

行動特性：以前は明るい性格だったということだが、いじめが原因で幻聴、幻覚、暴言、暴力などの不適応行動をおこし、精神的不安定になる。

日常生活動作：普段はほぼ自立しているが、不安定になると食事も拒否し、居室にとじこもってしまう。

意思疎通能力：日常生活に関することは言葉による意志伝達は可能。

しかし、不安定になると、会話は成立せずKさんの一方的な言葉となり意思疎通できない。

IV. 生活の背景

生育歴：ダウン症で生まれ、そのことが一つの要因となり両親離婚、母子家庭となる。在宅期間30年、母の過干渉、過保護の中で育つ。

入所前状況：養護学校高等部卒業。その後製箱会社2年就労、福祉開発センター8年通所、精神科入院約3ヶ月。

入所事由：2年前の転居より、精神的に不安定になり仕事にもいなくなり、高齢の母と二人暮らしで養育に不安があるため。

その他必要事項：バス送迎時の待ち時間でのいじめが原因で幻聴、幻覚などの不安定な状態となる。安定剤服用。

V. 援助の契機

本人の状況：精神的不安定時の不適応行動(幻聴、幻覚、暴力、暴言、水飲み、トイレがよい)の軽減のための積極的な対応が必要である。

問題の状況：帰省後、面会后など、母と別れた後が特に情緒不安定となり不適応行動が著しい。

目標と設定理由：作業と寮生活への自主的参加を目指す。

何か一つでも自信を持ち認めてもらえる喜びを持つことで、精神の安定を図り、自主的に活動できるようにするための第一段階として作業と寮生活への意欲的、自主的参加を目指す。

VI. 援助の内容

援助の手順：①本人が出来ることを探し、そのことを励みとして自信を持たせていく。②作業にがんばり表を持っていく。③作業を頑張ったらシールを貼る。④1ヶ月のシール貼りでその強化子として好きな物を1つ購入する。

援助の手法及び手段：不適応行動をおこさないよう精神の安定を図るために、不安の除去と自信を持たせていくための働きかけを行なう。目にみえる形として、寮での役割や作業を取り上げ、充分誉めはげましていくという統一した援助を行なう。又、母親との別れが精神の不安定を生み不適応行動をひきおこしているため、保護者へのアプローチにも重点をおく。

担当者：精神科医、寮職員

VII：援助経過

年月日	見出し語	問題状況	援助の経過（具体的な対応）
H 8 . 1 . 31	入所検討会	幻聴、幻覚	入所前は約3ヶ月、幻聴、幻覚、暴言、暴力のため精神科に入院していた。安定剤服用し、精神的にも不安定であるので元の明るいKさんになるようにしてほしいとの願いを知る。
2 . 28	入所	不安定	母と別れた不安で大泣きをする。不安をとりのぞき、落ち着くためのアプローチに努め本人の生活リズムを大切にしたい生活面の援助を行なう。
3 . 4		幻聴、幻覚 こだわり	「ズボンがこわい」「お風呂がこわい」「おばけがいる」と着脱、入浴、食事できず。よく話を聞いてやり職員がいるから大丈夫と励まし、安定に努める。 自分の衣類、持ち物へのこだわりが強く、タオルを洗面所につけられない。洗濯が待てず、洗濯機、乾燥機のそばから動けず、衣類の存在を確認させる作業をしていく。干した衣類を渡すとおちつく。
3 . 14	寮会議		①生活に楽しみがみいだせるようアプローチしていく。 ②気持ちの安定を図る。 ③作業参加は無理強いではなく、職員とまず一緒に行くことを目標とする。 ④保護者との連絡、アプローチ a. 指導方針を知らせる。 b. 過干渉、過保護のかかわりを少しずつ減らしていくようお願いする。
3 . 22	精神科受診		安定剤の服用継続
4 . 10	作業	(水筒持参) 水飲み、トイレがよい	作業休憩時、一人でお茶を5～6杯飲みつけ、トラブル発生。水筒を持参することで解決する。
4 . 19	母より Tel	不安定	母親との話で不安定な状態となる。母親へのアプローチをする(様子を知らせ会話の中で不安定をあおっているところがあるため、励ましていってほしいとお願いする)
4 . 28 {	春期家庭学習	暴言、暴力	帰寮後、母親の話を追い大泣きする。暴言、暴力有り。食事拒否して泣き叫ぶ。様子を観察し、落ち着くよう、気分を変えるアプローチをする。3日間不安定な状態続
5 . 5			

5.28	母より Tel 寮会議	不安定	く。 ①保護者へのアプローチを行ない、不安定になる要因をへらしていく。 ②自信やはげみとなる場面を設定する。(誕生会の司会や放送など) ③職員間の意思統一、イメージあわせ
6.7	作業班会議		軽作業班は一日作業のため、負担になっている様子。半日作業班への移行。
6.15	誕生会		6月の誕生会の司会をたのむ。上手に進行したので十分誉め、自信を持たせる。
6.22	放送		寮内での役割を持たせ、励みとなるよう、朝・晩2回の放送当番をたのむ。上手に出来、充分誉め自信を持たせる。笑顔がみられる。
6.23	面会日	不安定	保護者へのアプローチ(過保護・過干渉のかかわりでなく、Kさんができることを認め、ほめてほしいこと。Kさんのできることは、手を出さずにさせてほしいなど)
6.24	半日作業	水飲み トイレがよい	一日作業から半日作業の木工班に移行し、作業参加。何度も寮にもどり、水飲み、トイレごもりがある。作業参加が困難。
8.4 8.18	夏期家庭学習	幻覚、幻聴、情緒不安定	帰省中は家で暴力もあったとのこと。施設へもどることを知らされず、母親にだまして連れ帰られ不安定となる。放送当番などでときおり笑顔がみられるものの10日間、情緒不安定な状態が続く。母へ、だましてつれ帰るのはやめてほしいとお願いする。
9.22	面会日	奇声	母親へのアプローチ(Kさんのできるようになったことを誉め、手出しをひかえていただくよう話す)母親が帰ったあと、奇声を上げ不安定となる。
H8.9.25	ケース会議		精神の安定をはかり活動にスムーズに参加することを課題として検討する。 ①寮生活に楽しさを見出せるように役割を持つ…食事当番 ②作業に意欲がもてるようがんばり表をつける(シール) ③一ヶ月シールがたまると強化子として好きな物を購入する ④月に一度母へ手紙を書く ⑤母親へのアプローチ(過干渉・過保護のかかわりを少しずつ減らしていく)
11.29	強化子		はじめて作業がんばり表がシールでいっぱいになり、ピンクのイヤリング購入する。耳につけて明るくすごすが、安定せず波が激しい状態となる。
12.20	強化子		「乾杯」のカセット購入。ニコニコと帰省の荷づくりの中に入れている。(12月のがんばり表)
12.22	冬季家庭学習	不安定	3時間半、外で泣きつづけ、寮内に入っても精神的に不

H9. 1. 5 2. 1 3. 26 4. 27 5. 4 7. 27 8. 10 8. 24 9. 16 10. 23 10. 26 11. 5 11. 23 12. 11 12. 23 H10. 1. 6	面会日 春期家庭学習 保職研修 夏期家庭学習 ハガキ 外出 村まつり 手紙 面会日 外出 冬季家庭学習	幻覚 腹痛（たべすぎ） 頭痛 暴力 腹痛（たべすぎ） 腹痛 暴力	安定な状態づく。（3日間） 職員間のイメージ合わせを行ない安定を図る。 2日間不安定。保護者へのアプローチ。 3日間不安定。気分をかえるための日課や仕事を入れていく。安定する。保護者への具体的アプローチをつづける（だまして連れ帰らないこと） 母親の持ってきた食物で食べすぎ、腹痛（+）、頭痛（+）下痢（+）、2日間不安定。職員間のイメージあわせと母親へのアプローチ（たくさん食べさせることが愛情でなくかえってKさんの健康をそこなうことであること） 母の姿がみえる間は大泣きするがみえなくなると泣きやみ寮にもどることができる。不安定ではあるものの、安定したりをくり返す状態となり、約2日半ほど落ち着く。 母より葉書が届く。手紙のやりとりが励みになり安定する。返事を手伝って書くことで生活の中にスムーズに入ることができる。 外出後、不安定になり暴力をふるう。反省を促し、謝ることができる。 母親と模擬店をまわり食べすぎ、腹痛（+）、2日間不安定。保護者への具体的アプローチ。（食べさせるのが愛情でなく、適当な量を加減してあげてほしいこと） 母の手紙とハンカチのお礼にハガキを書く。安定している。 母親が帰った後コーヒーの飲み過ぎの腹痛有。夜眠れなくなる。保護者へのアプローチ。 外出後、不安定になり暴力有。Nさんに謝る。 保護者へのアプローチ。 不安定な状態は2時間程度でおさまり、自ら笑顔で話しにきたりして安定している。
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

援助の結果：入所した当初は、母と別れる場面、特に長期家庭学習期間後の帰寮日の精神的不安定がひどく、数日間にわたって不安定な時期が続いたが、本人の自信につながるような役割、司会や放送当番、作業が出来た時にシールを貼ってもらえることへの励みなどの自信づくりと集団生活に慣れるための援助を行なった。

ケース会議、寮会議、作業班会議などで職員間の意思統一を図り、本人のリズムを受容することを基本に、保護者への本人に対する過干渉へのアプローチ、自信づくりへの援助によって、不安定な状態が短期間となり、幻聴、幻覚などの不適応行動はほとんどみられなくなってきた。

改善された理由：①帰省後、母親と別れる時、母親自身にも過干渉に陥らず、さっと帰っていただ

くこと。

②寮内での居場所を確認するために、寮内での役割を持たせたこと。

③作業がんばり表をつくり、シール貼りによって自信と意欲を持たせたこと。

④1ヶ月のシール貼りの結果、充分誉め、強化子を設けたこと。

⑤保護者への具体的なアプローチをしたこと。(過干渉・過保護のかかわりを別のかかわり方に移行していく)

⑥職員間の意思を統一し、全員で取り組んだこと。

援助の効果：本人の変化

寮内での役割や作業への自信が精神の安定につながり、母と別れた後の不適応行動が軽減され、日常の行動に徐々にスムーズに入れるようになってきた。又、寮内で落ち着いていた生活が送れるようになってきたことで友人関係もできはじめ、会話を楽しむ姿もみられている。

母の変化…寮職員のアプローチにより、過保護、過干渉が少しずつ緩和されつつある。しかし母親へはこれからも継続したアプローチが必要である。

VIII. 考察

事後評価：現在、不適応行動（幻聴、幻覚、暴言、暴力）は軽減されてきているものの、気持ちの高揚がその後の不安定な状態に移行することが多い。しかし、長びくことなく、自ら行動できるようになってきている。このまま、自信を持たせ、励みとなる点を増やししながら、精神の安定を図り、より豊かな生活を送れるよう援助したい。そのために、保護者に指導方針を理解していただき、協力していただくために、根気よい具体的アプローチをしていくことが必要である。

反省点：過保護、過干渉の自覚のない母親へのアプローチが最初なかなか実を結ばず、指導方針そのものが理解していただけず、寮での援助が帰省のたびに後退を繰り返した。高齢の母親への根気よいアプローチが今少しずつ実を結ぶようになってきている。利用者への援助を行なう時、家庭と施設との連携なくしては成長は難しいということが今回よく感じられた。今後も母親へのアプローチを続け、Kさん自身の明るさを発揮し、自分の人生を楽しく過ごせるよう援助していきたい。

4242

I. 標題：一人帰省実施によって感情コントロールが出来るようになったケースの援助過程について

II. 事例の要旨：人間関係・自己実現

- ①些細な間違いでも相手を許せず口より手が早く利用者や職員に暴力を振う。
- ②普段は感情も豊かで、思いやりもある。好奇心も旺盛で何事にも積極的である。
- ③自宅が遠方で、保護者も知的能力が低いために、帰省がとぎれがちになり、本生の口から「一人で帰りたい」と希望する。
- ④事前学習や職員が付き添い帰省を3度行い、自信がついたところで実際に一人で帰省を実施する。
- ⑤その結果他生とのトラブルは減少し、腹を立ててもセルフコントロール出来るようになる。また就職したいと自立への意欲もでてきた。

見出し語（キーワード） 本生の希望・施設での事前学習・職員と付き添い帰省（不安の解消）・実行による自信・スーパーバイズ

III. プロフィール

氏名：M. O 性別：男 生年月日：昭和51年2月4日 21歳

入所年月日：平成7年4月1日 在所年数：2年6ヶ月

I Q：29 MA：4：8 知的障害の原因：不明（低体重児）

身体状況：身長154.7cm 体重：42.6kg 肢体不自由（運動機能障害）：有

視覚障害：無 聴覚障害：無 言語障害：有 自閉的傾向：無 てんかん：有

身体障害者手帳：無 療育手帳：有

行動特性：正義感が強く他生が間違っていると思った時に、発音が不明瞭なために意思が上手に伝えられない。その為時には感情が爆発し他生や職員に暴力を振ったり物を壊したりする。落ち着きを取り戻すと自分の取った行動を反省し自ら、他生や職員に謝る。

日常生活動作：身辺処理はほぼ自立しているが、整理整頓は無頓着で促されてもなかなか、しようとしなない。衣服の調節等、自信がない時は自ら確認を求めてくる。年に4回ほど夜尿が見られる。

意思疎通能力：構音障害が著しく、発音は不明瞭だが自分の考えや、不安なことを2～3語文程度で話せる（助詞の使用はみられない）。多少ひらがなは、書いたり読んだり出来るため紙に書いたりして、伝えようとする。

IV. 生活の背景

生育歴：周産期・妊娠中毒症・低体重児・家族は養育能力に劣る両親と本生の3人①3～6歳知的障害児通園施設②6歳～知的障害児施設（重度棟2年・一般棟1年）③両親が家庭に引き取りを希望していたが9歳の時近くの知的障害児施設へ措置変更②と③は併設養護学校通学

入所前状況：知的障害児施設

入所事由：両親の養育能力が劣るため

その他必要事項：両親は本生が一人帰省することを希望しているが協力はない。

V. 援助の契機

本人の状況：普段は感情も豊かで思いやりもあるが、些細なことでもおかしい、間違っていると思うと感情が爆発し他生や職員に暴力を振ったり物を壊したりする。

問題の状況：自宅が遠方であり（約32kmフェリー・電車・バスに乗り換える）保護者も知的能力が低く、十分に援助できず帰省がとぎれがちになり本生が非常に気にしている状況。

目標と設定理由：短期目標：本生と話し合い、施設での事前学習・実行。長期目標：一人帰省による自信を自立への意欲に結びつける。①帰省が出来ないために起る不安定な精神状態を取り除く②公共交通機関などを利用することで本生の社会性を伸ばす。③短期目標を達成することにより本生に自信をつける。

VI. 援助の内容

援助の手順：①事前学習としてケース担当がお金の種別、時計の見方、療育手帳を見せてから料金を払うことなどの援助を行い動機づけした上で本生の能力を考え、電車・バスなどの料金を小さな袋に入れて渡したり、施設を出る時間をきめることにより、バス・電車の乗りまちがえをふせぐ援助を実施 ②本生が実際に帰る時の様子を何度もイメージトレーニングをする ③①②をもとに職員が付き添い帰省する。

援助の手法及び手段：特別な療法・手法はつかわず共感的なかかわりを行う。本生と話し合い本生が一番理解しやすい方法をみつけ何度も援助を行う。

担当者：援護職員（ケース担当男性2年半）スーパーバイザー（援護課長）

VII：援助経過

年月日	見出し語	問題状況	援助の経過（具体的な対応）
H8.1.15	本生の希望	帰省が中止になったため些細なことで他生とケンカをすることが多くなる。	隔週帰省を行っていたが母親が風邪のため帰省が中止になる。本生の口から「自分一人で家に帰りたい」と発言がある（帰省回数も減少）
10月			①保護者の送迎による帰省ではバス・電車・タクシーの交通費は保護者が払っていた。 ②帰省回数も減少し、本生の帰省したい日に帰れないことが多くなる。 ③帰省時の交通費の負担が大きく保護者より、本生の年金から帰省の際の交通費を出してほしいと要望がある。（援護課長に相談の上了解する）
10月	スーパーバイズ		施設から自宅までの一人帰省の実施について援護課長に相談する。（一人帰省実施までの手順やポイント、今後の援助目標について助言を受ける） 本生はお金の種別や時計の見方などは正確ではなく、一人でバス・電車などを利用したことがない。本生が施設から外出する時は職員・保護者など困った時に助けてくれる者がいたが、一人帰省で何かあった時に本生は知らない人に助けを求めることができるだろうか。助けを求めても構音障害のため意志が上手に伝えられず、パニックになるのでは、また本生の身に何かあったらなど担当職員として不安と責任を感じる
10.4	施設での事前学習	帰省のことで頭がいっぱいになり作業も手につきにくくなる。他生とのケンカはたえない。	一人帰省の援助を行う。 ①お金の種別について100円、10円、5円、1円は理解しているが、50円を100円や5円に何度もまちがえる。また500円を出すとまったく理解出来なかったが、くりかえし援助を行うことにより理解出来るようになる。 ②時計について、アナログだとまったく理解できないためデジタル時計に変える。デジタルは理解しているよう

			<p>である。</p> <p>③電車から、バスに乗り換える時のバス停の番号を覚えることはすぐに理解する。</p> <p>④フェリー乗り場まで職員と何度か歩き道順を覚える。</p> <p>⑤本生が療育手帳を見せると料金が半額になることを理解したうえで、療育手帳を見せてから料金を払うよう援助する。(本生は帰省の時は療育手帳を小さな袋に入れ首からさげ帰省する)</p> <p>机上だけの抽象的な援助のためあまり本生は長く続かない。また「今すぐにでも帰れる」と腹を立てたり「自信がない」と不安がったりする。</p> <p>付き添い帰省を行いたいと援護課長に相談する。 (これ迄の経緯を整理)</p>
H 9. 4	スーパーバイズ		
4.12	職員と付き添い帰省	<p>付き添い帰省を行うことを本生につたえると少し不安がるが意欲的にとりくむ。しかし容易に立腹することが多く暴力となってあらわれる。</p>	<p>付き添い帰省を行う。徒歩でフェリー乗り場まで行きフェリーに乗る。その後電車・バスに乗り換え自宅まで帰省する。フェリー乗り場までの道順・バス停の番号・バス・電車料金の払い方・電車からバスへの乗り換え、降りるバス停など本生が理解しているかを確認する。本生がわからないことがあれば、すぐに教え理解するまで何度も援助する。本生は電車・バスの料金の払い方は理解しているが、早く降りなければという焦りからうまく払えないことや、バス停の番号は理解しているが、自分の家の近くのバス停に止まるバスが何時に出発するか理解出来ないことに気付く。戸惑いながらもその他のことは理解しているようであった。</p>
4.29	職員と付き添い帰省		<p>2回目の付き添い帰省。1回目をもとに本生と話し合い次の方法をとることにする。</p> <p>①フェリー乗り場まで行く途中に何かあったら前もって決めてある場所から施設に電話をする。</p> <p>②施設を出るのは AM11:20頃を決める (バスの乗り換えにちょうど良い時間にバス停に行けるため)</p> <p>③バス・電車の料金を前もって小さな袋に (2つ) 分けてわたす (料金を払う時にスムーズに行うため)</p> <p>④困った時のためカードに「これは〇〇行きですか」「施設に電話してください」と書いてあるものをわたす。</p> <p>⑤自宅についたら施設に電話をする。</p> <p>という方法を行う。また実際に行う前に本生の頭の中で何度も帰っている時をイメージさせる (イメージトレーニング) 実際に付き添い帰省を行っている時は本生が困った時のみ援助を行ったが、前回にくらべスムーズに帰省でき本生が帰省する時の不安もなくなる。</p>
5.19	単独帰省	<p>他生や職員に暴力を振るうことが減少</p>	<p>付き添いなしの帰省を行う。電車からバスの乗り換えもまちがえず (但し職員は本生に気付かれぬよう付き添う) 無事帰省。自宅より着いたと電話がある。これ以後の帰省は本生一人で帰省を行う。一人帰省を行うようになってから他生とのケンカが減少し納得できないことがあっても我慢するようになり腹を立てても暴力を振るうことは少なくなる。</p>

	実行による自信	帰省出来た自信から自立したいという意欲がみられるようになる	本生の口から早く施設を出て一人で暮してやがて結婚したいと発言も聞かれるようになりこれ迄以上に色々なものに興味を持ったり参加するようになる。
--	---------	-------------------------------	-----------------------------------------------------------------------

援助の結果：①他生とのトラブルが減少、納得が出来ないことがあっても我慢できるようになる。
 ②例え腹を立てても手を出すことは減少する。
 ③施設内行事に積極的に参加するようになり、色々な物に興味を持ったり参加したりするようになる。
 ④早く施設を出て会社に勤め一人で暮らし、結婚したいなど自立の意欲がみられるようになる。

改善された理由：①本生が帰省したい日に帰省出来るという自分の意思が尊重されたから。
 ②本生が一生懸命に努力し最後まで自分の意思でやりとげたという達成感で自信がついたから。(成就体験)
 ③一人帰省に取り組む前からケース担当は指示的かかわり方ではなく、受容的かかわり方をし、本生の乱暴に対してペナルティーを与えないで本生と話をし、なぜ乱暴な行動をとったか聞き正しいところは認め、正しくないところは注意する援助を行った結果、担当職員と信頼関係が出来、一人帰省でのお金の種別・時計の見方・バス停の番号・フェリー乗り場までの道順などの援助を行うことによってさらに深まったため。
 ④適宜スーパーバイザーと相談しながら援助を行ったから。

援助の効果：性格面…腹を立てても相手の話を聞いたり、本生がなぜ腹を立てているか職員に訴えるようになる。また一人で暮らしたいなど自立への意欲がみられるようになる。
 対人面…本生のことを能力的に低いと思っていた他生も一目置くようになる。
 職員…本生のトラブル発生時の対処について職員会議で話し合い統一的行ったことで本生の混乱も少なくなり、職員はチームプレーの大切さを経験した。

VIII. 考察

事後評価：施設での事前学習では、出来た電車・バスの料金の払い方も実際に、付き添い帰省を行ってみると本生が早く降りなければいけないという焦りからうまく払えない。電車からバスへの乗り換えの際に時刻表が理解出来ない、など問題点が出てきた。本生が焦らないように、料金は前もって小さな袋に入れ渡す。乗り換えの際良い時間になるよう施設を出発する時間を決めるなど、やり方を変更する。その結果本生の心配もなくなりスムーズに帰省出来るようになった。一人帰省が出来るようになり、帰省出来ないという不安が解消され他生への暴力をふるうことが減少する。また本生は施設歴が長く自発性・自立性意欲が減退していたが、当施設にて、一人帰省を自分の意思で最後までやりとげたことにより自信がついたため「一人で暮らしたい」など自立したいという、意欲をもつにいたった。今後は本生と話し合いながら自立出来るよう、施設から通えるような企業に実習に行くなど、自立の援助を行っていきたい。

反省点：①今回は、一人帰省だけだったが、帰園も一人で行えるように援助をする必要がある。
 ②本生には主に担当職員が援助をし、スムーズに行えたが、本生に事故が発生し緊急を要する時や、細かい援助を行う事を考えれば、チームで援助を行う方が良い。

他との比較：本生の一人帰省は、難しいと思っていたが、実際に援助を行って一人帰省を行うことが出来た。他生にも、本人の意欲と可能性をみて、拡大していきたい。

4243

I. 標題：趣味の開拓とゆうあいピック出場という目標達成までの援助過程

II. 事例の要旨：人間関係・自己実現

- (1) 目標を持ち、それを達成させる経験をさせること。
- (2) 意欲的に取り組める趣味を開拓し、生活に張りを持たせ「楽しい生活」を実現させる。
- (3) ゆうあいピック練習会、選手選考会に参加させていくことで、本人の中でボーリングが目標になり、意欲的に取り組める様になる。
- (4) ゆうあいピックの選手になり、本大会で自己ベストの記録を出し、メダルこそ取れなかったが本県勢の中でトップの成績を取る。

見出し語（キーワード） ボーリング講習会、帰省中の練習、ゆうあいピック強化練習、ゆうあいピック愛知・名古屋大会

III. プロフィール

氏名：K. O 性別：男 生年月日：昭和44年10月11日 28歳

入所年月日：昭和63年4月1日 在所年数：10年

IQ：52 MA： 知的障害の原因：自閉的傾向のため（中度精神発達＋自閉的傾向）

身体状況：身長171.5cm 体重：69.0kg 肢体不自由（運動機能障害）：無

視覚障害：無 聴覚障害：無 言語障害：無 自閉的傾向：有 てんかん：無

身体障害者手帳：無 療育手帳：有

行動特性：特に大きな問題はなく、性格的に穏やかである。自閉的傾向を有するが、パニックや特に違和感を感じる様なこだわりは見られず。

日常生活動作：自立

意思疎通能力：言葉遣いにおかしさはあるが、ほぼ会話は成立する。

IV. 生活の背景

生育歴：幼稚園で3年保育、1年就学猶予の後、小学校普通学級、中学校特殊学級を経て、養護学校高等部進学。1年時は寄宿舎へ、2年時より自宅通学。

入所前状況：養護学校高等部

入所事由：社会性の低さから入所施設を親が希望。

V. 援助の契機

本人の状況：養護学校高等部を中退し当施設へ入所。ほぼ10年が経過した今日ただ受動的に施設での時間を過ごすのではなく、充実した余暇や「楽しい生活」を実現するために、より積極的な趣味の開拓へのアプローチが必要となってきた。

問題の状況：何かに目標を持たせ、自身でそれを達成させる経験をさせること。意欲的に取り組める趣味を開拓し生活に張りを持たせ、より主体的に「楽しい生活」を実現させること。

目標と設定理由：短期目標…ゆうあいピックへの出場 長期目標…趣味の開拓と豊かな生活の実現
理由＝①ボーリングでゆうあいピック出場を目標に設定することで、これまでとはボーリングに対する意識を変えより積極的に楽しめるものへとするため②個々のニーズに合った豊かな生活を提供できる様にするため。

VI. 援助の内容

援助の手順：①目標の設定と目的意識の強化。

②目標達成への意欲と集中力を培う。

③目標達成後も生活の中に取り入れ豊かな生活へのニーズに応じていく。

援助の手法及び手段：特別な手法は用いず、手段としては、ボーリング講習会、練習等への参加と、余暇活動での導入。

担当者：ゆうあいピック担当職員、生活クラス担任

VII：援助経過

年月日	見出し語	問題状況	援助の経過（具体的な対応）
H8.3.20	ゆうあいピック ボーリング講習会	目的意識低い	ボーリングに行ける事自体は楽しみにするが、ゲームそのものへの関心度は低く、まだまだ遊びの延長である。
5.20	ゆうあいピック 選手選考会	「選手」への目標の欠如	選手選考会に出場したものの、本人にとっては選手に選考されるという目標もないため、その場で少し緊張感を持たせようとするが、投球、得点に対し全く関心を示さず。
H9.2.18	ゆうあいピック ボーリング講習会	目標意識の欠如	まだまだ本人にとって目標の設定されず。この講習後、担当職員、施設長、生活クラス担任との間でゆうあいピック出場を目標にしていく方針を立て、本人へも働きかけていく。
4.16	ゆうあいピック ボーリング講習会	目標としては設定されたが、意識は低い	ゆうあいピックに出るという目標は設定されたが、まだ遊びのボーリングの位置づけであるため、ゲーム中の真剣さ、集中してやることを主眼においてアプローチしていく。なお講習会の後、施設長との話し合いで本人の目的意識の強化、「遊び」から「スポーツ」への意識改革のためマイボール、マイシューズ購入を検討。
4.19	マイボール マイシューズ購入	「目標」への意識強化	マイボール、マイシューズを外勤班からの支給金で購入。本人の中でボーリングに対しての位置づけがよりはっきりとし、目標を意識し、職員にもその事を話す様になってきた。
4.26	余暇を利用した 練習	余暇の過ごしと練習を兼ねる。1ゲームを通しての点数に関心なし	土曜日の午後など作業のない余暇の時間を利用し、趣味と練習を兼ねていく。ゲーム中、1投ごとには何本倒れたかは気にし、ストライク、スベアが取れば喜んでいたが、1ゲームを通しての得点は全く気にしてなく全く無関心であった。
5.3 ～ 5.8	帰省中	帰省中のボーリングでは目標点数を設定し意識させる様にしていく	帰省時毎回恒例の母、友人とのボーリング。帰省前の本人とのやりとりの中で、少し高め目標120点を設定し、この目標を目指す様に言っていく。この頃からボーリングでゆうあいピック出場が目標になった様で、意欲、集中力の向上が見られる様になってきた。期間中に5ゲーム中2ゲームで目標点数をクリアし、うち1回は自己ベスト130点を記録。130点が出たので次回より目標値を130点にアップ。
5.18	ゆうあいピック 選手選考会	目標点数に対しての意識は出てきたが、ゲーム中を通しての集中力の持続が課題	いよいよ選手選考会になり、自分の目標点数130点を意識しながらプレイできるようになってきたものの、2ゲーム終了まで緊張感や集中力を継続させることが難しいため、ゲーム中ずっと付き、1投ごとに声をかけながら、緊張の持続と投球に対する集中力を高める様にした。結果スコア的には目標点数までは届かなかったが、まずまずの

			得点を得られた。
6月下旬	候補選手発表	「選手」への目標は達成できなかったが、次回選手になることを新たな目標としていく。	補欠の1番ということでゆうあいピック愛知・名古屋大会の選手には届かなかったが、次回の大会には選手になれる様にトレーニングして行こうという方向で本人と話し。目標、意欲の継続と新たに基礎体力の向上を目指して筋力トレーニングを生活の中に取り入れ、目標達成へのステップとしていく。
6.24	強化練習兼ボーリング講習会	「選手」からはずれ緊張が跡切れ点数が伸びなくなる	これまでより調子ができた緊張感がやや跡切れたのか点数が伸びなくなる。本人も思う様に点数が伸びなくなったことで元気がなくなってきたが、トレーニングの方は次回大会への出場という目標があるため続けていく。
7.3	選手選考通知	「目標」のステップアップ	補欠が繰り上がり、一転して選手に選ばれる。本人も思わず目標が達成できたので、たいへん嬉しそうであった。当面第一の目標であったゆうあいピック出場が達成されたため今度は第二の目標として新たにゆうあいピック本大会でメダル獲得と本人と話し合いながら設定していく。
7.8	帰省中	スランプ状態	帰省中恒例のボーリングであったが、本人の体調が悪かったことも重なり、思う様な成績が出ずに本人も不満な様である。本人も目標点数130点ということを意識しており、納得の行かない様子を表情に出す様になった。「遊び」のボーリングから「スポーツ」のボーリングへと変わって行った様である。
9.16	選手強化練習	スランプ状態の打開に向けて	ボーリングに行っても思う様に点数が伸びず本人も悩んできている様な感じであるため、できるだけ軽く接する様に心掛け、気持ちの転換を図る様に配慮していく。技術的なことにはあまり口を出さず、とにかく1球1球落ち着いて投球する様に指導していく様にする。
8月下旬	夏休み	「焦り」から意欲集中力の低下	なかなか思う様な成績が出せないことで焦りの様なものも見られ、目標得点への意欲、ゲーム中の集中力の低下などが見られた。
8.26	卓上ボーリングゲーム	「遊び」的なボーリングの取り戻しと点数の仕組みの学習	スランプ状態でなかなか思った様に結果が出せないでいる時、ちょうど生活クラスの方で余暇のすごしでみんなで遊べる卓上ボーリングゲームを購入。もう1度原点に戻り「遊び」のボーリングをしながら自分でスコアをつけさせ、スコアの計算の仕方を教えていく。これまで本人は1投ごとに何本倒れたかは気にしていたが、スコアの仕組みまでは理解できてなかったため、この遊びを通してストライクやスペアーを取った後の投球が大切であることを教える機会を持てた。
9月中旬	帰省中	ゆうあいピック目前にして点数が伸びずに不安になる	9月の帰省でこの時も恒例のボーリングに行くが、やはり点数が伸びず不満な様子であったらしく、ゆうあいピック目前になり目標である130点をこえられず不安な表情を見せることがあったらしい。
9.17	強化練習	「焦り」「ゆとり」のなさ	強化練習に出てもスコアは伸び悩んでいるため、あまり本人を追いこまずリラックスしてゲームができる様にし

10. 8	強化練習 結団式	気持ちは引き締まるが 点数伸びず	ていく。また本大会では職員も同行できず1人でゲームをしなければならぬため、ゲーム中は全く声をかけず遠くの方から様子を見る様にした。 強化練習ではあまり点数は伸びなかったが、あまり声もかけず遠くから見ていた。強化練習の後結団式がありユニフォーム等が支給されたことで気分も変わり新たな意欲が出てきた様である。
10. 11	帰省中	焦りと緊張	本大会1週間前になり、新たな意欲が出てきた反面思う様な点数が出せない焦りと不安があり、恒例の帰省中のボーリングも5ゲーム練習した様子。この時も気持ちばかりが焦り、あわてて投球しているため2ゲームはまずまずであったが、3ゲーム目以降は点数が伸びなかった。
10. 18 ～ 19	ゆうあいピック 愛知・名古屋大会	ほどよい緊張の中での 本番	大会当日は、2日に分け2ゲームずつ計4ゲームの競技である。本人は全く知らない環境での大会であるが、むしろほどよい緊張があったのか1回目は111点、111点とスランプ状態が嘘の様なスタートであった。2回目になると、ほどよい緊張と雰囲気への慣れもあったのか133点、140点と自己ベストの得点であった。 第二の目標であったメダルを取ることは届かなかったが、グループ第4位で、本県勢ではトップの得点であった。

援助の結果：ゆうあいピック出場を目標にしてから、ボーリングの技術的な練習に加えて、本ケース自身に目的意識を持たせること、つまりまわりの人に出させてもらうのではなく、自分自身で目標を達成させる度量をすることを最重視してきた。

その中で具体的な目標の設定、意欲向上のためにマイボール、マイシューズの購入、目標を達成させるための援助を行い、最終的にはゆうあいピックに出場しメダルこそ取れなかったものの自己ベストの成績をおさめることができた。またこれと同時にこれまでボーリングに対する意識が変化し、行くこと自体が楽しみであったが、今は何点取れるかということにも関心を持つ様になり、ボーリングの楽しみの範囲を広げることができた。

改善された理由：①本人との話し合いで目標を設定し、自ら達成しようとする意欲を引き出させるようにし、満足感、充実感も含めた楽しさが経験できたこと

②「ゆうあいピックに出場するには」「メダルを取るには」と目標を設定したことで、1回の投球で何本倒れたかという問題だけでなく、1ゲームにどれだけ点数が取れたかということに関心が移ったこと。

援助の効果：本人の意識～より主体的に楽しめる様になり、喜びや満足感、充実感を実現しながらゲームをする様になった。また何事においてもより積極的に楽しもうという姿も見られる様になった。

VIII. 考察

事後評価：これまで「ゆうあいピック出場」「メダルの獲得」などの目標を設定して挑戦させてきて、一応これらの目標は完全ではないがクリアした今、この経験を生かし今後も趣味として、あるいは再度ゆうあいピックへという様に継続しながら、更なる生活の中の広がり、豊かな生活へと発展させられるかが、今後の課題かと思われる。援助者は、集団で生活している中でいかに個々のニーズを発掘し、それに応えていく姿勢が必要であると思われる。

4245

I. 標題：無断外出の防止と集団生活に慣れるための援助過程について

II. 事例の要旨：人間関係・自己実現

①集団生活に慣れるかどうか

②情緒不安定時の行動観察と援助

③家族の援助と職員のコミュニケーションを多く持った過程で問題行動が減少してきた。

見出し語（キーワード） 無断外出・コミュニケーション・ほめる・見守る・情緒の安定

III. プロフィール

氏名：J. I 性別：女 生年月日：昭和30年6月13日 42歳

入所年月日：平成7年4月1日 在所年数：2年8ヶ月

IQ：30 MA：4：10 知的障害の原因：重度精神発達遅滞

身体状況：身長156cm 体重：67kg 肢体不自由（運動機能障害）：無

視覚障害：無 聴覚障害：有 言語障害：無 自閉的傾向：無 てんかん：無

身体障害者手帳：無 療育手帳：有

行動特性：気分のむらがあり、反抗的で自己中心的。意にそぐわなければ寝こんでしまう。無断外出をする。乱暴行動をとる。

日常生活動作：身辺処理は自立している。TPOに応じた服装調整は指示が必要。日用品の購入ができる。

意思疎通能力：右耳難聴（補聴器にこだわりを持っていてうまく使用できない）。口調が乱暴で表現不十分。ごく限られた人にだけ交流可能。（家族、職員）簡単な指示・理解可能。

IV. 生活の背景

生育歴：出生時は特記所見なし。2歳頃から遅れに気づいていたが就学年齢となって普通学級に通学。中学3年間で卒業。卒業後は両親と過ごす。

入所前状況：両親のもとで家事手伝いをしながら暮らしていた。（農業）

入所事由：平成7年3月13日父親15日母親死亡。両親が亡くなり単独で生活が困難となった。

V. 援助の契機

本人の状況：自分本位の言動多く、思う様にならないと、体の不調を訴える（腹痛）、寝こむ、トラブルを起こし無外へと発展する。

問題の状況：情緒不安定による問題行動（人を叩く、無断外出）が生じる。作業日課の参加・意欲が持てない。

目標と設定理由：長期目標。集団生活に慣れる。作業日課の参加。問題行動時はその都度対処し気持ちを落ち着かせ本人を納得させる。

VI. 援助の内容

援助の手順：①情緒の安定をはかる。（体の不調の訴えに対しては医師の診断を伝え病気でないことを納得させる）

②気分転換をはかる。（体を動かすことを目的に園周辺の歩行を励行）

③経験を多くさせる。（外出、行事に参加）

援助の手法及び手段：職員はコミュニケーションを多くとるよう心がけ、本人の意向を受け入れながら見守る姿勢を続け問題行動が生じた場合は、その都度対処し注意をうながす。

担当者：指導職員、看護婦

VII：援助経過

年月日	見出し語	問題状況	援助の経過（具体的な対応）
H7.3.29	施設入所以来	単独で生活ができない	H7年3月13日・15日に両親が亡くなり、A市在住の姉の家に一時身を寄せていたが家庭の事情もあり引き取ることができないため依頼があった。
4.1	入所		入所の状況 ①日常生活・人間関係 集団生活に馴れず、自己中心的行動をとり、トラブルを起こす。 ②作業日課 縫工作業～針仕事、細かい縫い目で上手にするが余り好きでないと表現する。 割箸作業～単純作業で肩がこると疲れを見せる。 畑作業～家での経験もあり好んでする。
4.19	指導会議 ケース紹介		作業状況より縫工作業班に所属する。
5.10	棟会議 目標設定	集団生活に慣れる	入所より1ヶ月経過。ごく限られた人間関係から集団生活のリズムに合わせられず、泣いたり、ふて寝をしたり、気ままな態度が他の利用者から反感をかう。経過観察の継続。
7.19	外科受診	腰痛の訴え	体の不調の訴えが出て来る。腰痛検査X線を撮り異常のないこと確認させ湿布をして落ちつかせる。
9.25	胃腸検査	腹痛の訴え	腹痛の訴えが続いているため大腸検査（エコー検査）を受けるが異常は認められず本人に納得させる。運動不足のため歩行に参加させる。
9.23	無断外出	逃避	集団生活に慣れず体の不調を訴えるが異常もなし（自分の思う様にならない）利用者と仲よくなれずトラブルが続き不安定な日々。コミュニケーションを取りながら観察を継続。
12.2	無断外出	逃避実行	腹痛の訴えをしながらも食事にだけは起きて来る。看護婦に看てもらう。無断外出（夜から朝にかけて）、自ら駐在所に行き保護された。保護者の援助で安定を図る（環境を変えるの意味で一時帰省している）
H8.2.4	無断外出	〃 未遂(1)	(1)～(4)情緒の安定がなかなか得られず体の不調を訴えたり寝こんだり人にあたり逃避しようとする。本人の意向（家族の面会、中学時代の友人への手紙の下書きと郵送の援助）を受け入れ職員との関わりを深められる機会を多く設定し観察を継続
H9.3.5	無断外出	〃 実行(2)	
4.24	〃	〃 未遂(3)	
7.24	〃	〃 〃 (4)	
9.25	乱暴行動	謝ることができない	

H 8 . 6 . 3	作業の見直し	作品に参加できない	縫工作業から割箸作業に所属する。 当初は参加状態悪く寝ころがったり、人を叩いたり、作業意欲もない。気が向いた時だけの参加が続く。少しでも出来たらほめるを繰り返すことで徐々に成果がでて来る。職員とのコミュニケーションがうまくとれる様になり集中して、作業ができるようになって来た。 ほめることを多く、喜びを与えることで自ら参加する姿勢に変化を示す。
-------------	--------	-----------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

援助の結果：入所後2年8ヶ月が経過し一進一退ではあるが変化が見え始めてきた。起床時刻前の洗濯機の使用がなくなった。体の不調の訴えが少なくなってきた。寝込まず作業に参加するようになってきた。テレビも観られるようになった。手芸的なこと・パズルをしようとする気持が出てきた。小さい子を可愛がる等、人との関わりを求められる様になってきて精神的安定が保てる時間がわずかながら得られるようになってきたこと。

改善された理由：・体の不調の訴えを聞き入れ医療診断の結果を知らせ、病気でないことを納得させた。

- ・問題行動の把握を常に行い、トラブルを起し興奮状態にある時は抱きしめて気持ちを落ち着かせた。

- ・本人の欲求を満たす、家族との関わり（電話・面会）を持たせ、友達への手紙の下書きと発送の援助をしてきた。

- ・注意することも必要だが良いときには大いにほめるを多くし自信を持たせた。

援助の効果：職員とのコミュニケーション…欲求を受け入れ関わりを多く持ったことで理解と信頼関係が相互に保たれ情緒の安定が図られるようになってきた。

作業参加の意欲…少量の成果でほめられ、次のステップでも認められることにより仕事が楽しい時間になってきた。作業の参加状態が良くなってきた。

VIII. 考察

事後評価：限られた人間関係の生活から集団生活になり環境に慣れずに何かにつけ逃避しようとしてきたが職員とのコミュニケーションや保護者の援助があり少しづつ環境に慣れてきた。経過を踏まえて継続するものであり、本人とのコミュニケーションは必要不可欠なものである。又、職員との人間関係を通して利用者へと拡大されていくよう配慮し、多くの経験を重ねより豊かな成果を過ごせるよう援助していく。そのためにも保護者の理解と援助が必要である。

反省点：今後の課題…集団生活に慣れて来ているが今後も観察を継続する必要がある。良くなった面もあるが、改善されない面も残されている。本人は口調が乱暴なため表現が充分でない。そのためトラブルの要因多大である。その都度対処援助していく。本人を理解し見守る姿勢、方針は継続していく。

I. 標題：達成感を味わえる目標の設定により何でも積極的に取り組む様になった事例

II. 事例の要旨：人間関係・自己実現

(1) ある程度の指示が通り、身辺処理もほぼ自立しているが、次にステップを望み、助言すると反発が強く出たり、余暇をどの様に過ごしてよいかわからずに、他生にちよっかいを出したり、度を越して粗暴行為に移行したりする。

(2) 余暇活動（自由外出、旅行、絵画）、身辺処理の幅を広げ、認めてほめる。

(3) 常に認めて、ほめ、期待をし、自己満足を味わせる。

(4) 粗暴行為の減少、意欲的な生活態度。

III. プロフィール

氏名：T. S 性別：男 生年月日：昭和26年2月10日 46歳

入所年月日：昭和60年5月1日 在所年数：12年

IQ：29 MA：／ 知的障害の原因：出産直後高熱（原因不明）重度の知的障害

身体状況：身長148.6cm 体重：55kg 肢体不自由（運動機能障害）：無

視覚障害：無 聴覚障害：無 言語障害：有 自閉的傾向：無 てんかん：無

身体障害者手帳： 療育手帳：有

行動特性：自分の意に添わない指示、指導を受けると粗暴行為に移行したり、外仕事等は率先して参加するものの、裏の方に隠れていたりする。世話好きで、面倒見が良いが度を越してしまったり、時には威圧的な態度を取ることがある。が、自分より強い人には服従傾向。

日常生活動作：ほぼ自立だが、衣類の重ね着や、汚れ物をタンスにしまっしてしまったり、湿っているうちに取り込んでしまう。

意思疎通能力：言葉はかなり不明瞭ではあるが、慣れれば日常生活に支障のない程度である。相手からの言葉はほとんど理解可能であり、相手の表情等から先に意志を組み取るような所がある。

IV. 生活の背景

生育歴：詳細不明。1年就学猶予。A小学校1年普通学級、2年よりH小学校特殊学級。H中学特殊学級卒。後、壇工場に勤務。母死亡後（S59年）兄と二人の生活だが、兄は定職もなく本人の年金手当と給料をあてにした生活で、家賃も滞納し、再三再四家主より立退きを迫られていたが、本人の退職金で別のアパートに移転する予定であった。しかし、退職金をすべて兄が持ち去り、本人の生活の場として施設入所をさせた。

V. 援助の契機

本人の状況：問題行動（粗雑さ、身辺整理等）を注意し、欠点を洗い出すような指導をする事によりかえって問題行動が目立つようになってしまった。

問題の状況：問題行動に目がいくことで、本人の持つ人間性、長所を見失ってしまう。

目標と設定理由：短期目標…自由外出の実施 長期目標…余暇活動の充実、自己実現

①外出に慣れた人をリーダーとして一緒に行動させる。（月に一度）②自主性を持たせるために外出者と共に計画書を作製させ（本人は参加のみ）それをコピーして渡し（読書きは不可）反省会をする。③月に1度のボーリングの実施で技術の取得。

VI. 援助の内容

援助の手順：①訓練としての余暇活動ではなく、見よう見まねで楽しめればよい。②直接職員はか

かわらず、リーダーに一任する。又、本人の主体性を尊重するために、本人の希望するものを購入させる。③絵画等では一緒に時間をすごす事で充実感を味あわせる。

援助の手法及び手段：①あくまでも本人の自主性を尊重する。

②次に希望や夢がにつながる様に援助する。

担当者：施設職員

VII：援助経過

年月日	見出し語	問題状況	援助の経過（具体的な対応）
S60. 5. 1	入所	面接 身辺面	単身なため詳しい調査できず。 ほぼ自立。
5. 21	卓球		荒々しいプレーで、楽しむというより単に打っただけ。 うまく打てない時はラケットを投げたりする。
6. 21	興奮		注意された職員に平均台を投げつけ、顔面を引っかく。
S61年度	目標	負の強化	・物を乱暴に扱わないようにする。茶化さず、けじめをつける時はきちんとつけられる。粗雑な態度を改善する。 ・人の話を聞く事が出来ず、別の話をしたり茶化してしまう。その度注意したり、話しをしたりする機会を与えるが、なかなかうまくいっていない状態。しかし他人の面倒をよく見ている。やさしい面もある。時々乱暴になってしまうのが残念。 洗濯は自分でできるが乾燥していない状態でタンスに入れてしまう事もある。
	中間評定		情緒はほとんど安定しているが、時々暴力をふるう時あり。他生に対して関心が強く面倒見がよい。しかし頭をたたいたり、乱暴になる事多し。大声をはりあげる事もあるが性格上の問題もある為あまり強く注意せず。人に乱暴をしない、ドアなど物を大切にすることに重点をおいた。具体的な話しをし理解させるよりはその度注意をした方が本人には理解できる様子。
	最終評定		洗濯指導では自立できる様になったが、完全ではなく時々すすがなかったりする。又、乾いてないものをタンスに入れる事があった。何度かの指導でみられなくなった。
S62年度	目標	負の強化	・粗雑な態度及び物の扱い方を改善する。・集団の中での自分の位置づけをはっきりさせる。
	中間評定		・職員の目の届く所と届かない所では態度が異なり、粗暴な行動をとっているが、都度つどの声がけで落ちついてきている。ある程度のけじめもついてきている。 ・自分の好む事については必要以上にやるが、嫌いな事には手を出さず極端であるため集団の中へとけこめない。
	最終評定		・自分に不利な話になるとパイと席を立ち荒々しくドアをしめ物をけとばしたり、乱暴な態度を取る事があるが、情緒は安定しており暴力はほとんど見られなくなってきた。他生の面倒をよく見てくれ、ふざけの相手でもある。淋しがりやで、常に指導員の存在を確認し、世話をしてくれる。ミーティングには加わるが話の内容が理解できず、とんでもないことを言い出すので攻撃される。笑っ

S 63年度	目標	負の強化	<p>て茶化しその場を切り抜ける。行事（特に歌謡ショー等）に敏感で早くからかき出す。憎めない存在感のある人物である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・洗濯も最近はやっているが干し方に問題あり濡れた物をしまい込んだり声かけが必要である。 ・作業面では好きな作業（土を一輪車で運んだり掘ったりする事）が冬場はないので、体調を理由にさぼるくせが出て来ている。全体的に飽きっぽく持続性がない。 ・粗暴行為をなくしていく。・何事に対しても持続性をもたせる。
	中間評定		<p>あまり人の話を聞かない上に、本人に関係ない話にも口を出してきてしまう。その度に注意をしているのだが「はい」と返事をするだけで、こちらの言っている事を理解していない。・重度者の面倒を本当に良くみってくれる。こちらが気が付かない細かい点にも気を使ってくれ、親切心は旺盛である。同じ服を着続けたり、洗濯物を溜めたりなどあまり清潔感がなく、干し方にもまだ難点がある。</p>
	最終評定		<p>・職員の指示はある程度理解してくれ、いろいろと行っているのだが、あまり持続性がなく最後まで終わらないうちに関係ない事をやってしまう。ただ、重度者の面倒は親切に一生懸命にみってくれる。・情緒は安定していたが、時々他生とふざけあっていて、だんだんエスカレートしてしまい、しまいには本気になってしまう事があった。又、居室のドアを強く閉めたり、物を乱暴に扱うこともみられた。・話しをする態度より聞く態度が粗雑な所があり、自分に不利な話しになると、茶化したり、どこかに行ってしまう。・声掛けをしたり、その都度注意をしているのだが、まだ季節、場所にあった衣類の調整が出来なくて汚い服でも何日も着てしまっている。洗濯の干し方は以前より改善されてきた。・まだ肥満の傾向がある。</p>
H元年	目標	負の強化	<ul style="list-style-type: none"> ・粗雑な態度を改善していく。・衣類の調整を身につける。・肥満対策
	中間評定		<p>・職員の注意を素直に受け入れられるようになり、乱暴な態度も減少してきている。・相変らず重ね着が目立ち、ぬれた衣類をタンス内に入れてしまうことがある。</p>
	最終評定		<p>・粗雑な態度も徐々に減少しているが、三月に入り一度乱暴な態度がみられた。・重ね着も多あり、相変らず自分の気に入った衣類を何日も着ている事があるが促すと素直に応じて着替えるようになった。</p>
H 2 年度	目標	負の強化	<ul style="list-style-type: none"> ・衣類の調整を身に付ける。 ・健康管理
	中間評定		<p>・暑くなるまでは重ね着が目立っており、調整の度合いが検討つかない。</p> <p>・茶話会や食事時のおかわりなどで過食が目立ち体型も肥満型になってきている。</p>
	最終評定		<p>・重ね着は相変らず、確認された。調整の度合いが検討つかず、又、不衛生である。</p>